

株座が維持されること

南丹市園部町竹井の宮衆の地位をめぐる

大野 啓

Kabu-za Being Maintained : Over the Position of Miyashu in Takei, Sonobe-cho, Nantan City
OONO Hajime

はじめに

- ① 丹波地域の祭祀組織
- ② 摩気神社の祭祀
- ③ 竹井の祭祀組織
- ④ 宮衆であること
- ⑤ 宮衆でないこと
- ⑥ むすびにかえて

【論文要旨】

本稿はいわゆる株座的な形態を持つ口丹波に存在する南丹市園部町竹井の祭祀組織がどのような構造を有しているのかを検討し、株座的な祭祀組織の形態が何故、現在まで維持されているのかについて論じたものである。

竹井では宮衆と呼ばれる家筋から選出されるクジユウノトウという役割と元摩気という小地区に存在している株の全てから選出されている宮衆という役割が存在している。これらの役割を勤めることができる家は、竹井のみならず周辺の村落の人々からも由緒がある家筋であるという評価を得ている。なお、クジユウノトウを選出する宮衆は特定の株の本家が勤めるものとされており、由緒ある家であることが宮衆となる要件であると考えられている。しかし実際には宮衆の中に経済的な事情で竹井から退転した事例もあり、同じ株の成員が宮衆の権利を継承していた事例がみられる。このような事実から元摩気ともう一方の宮衆の権利は一義的には特定の株に付与されたものであり、どの家が宮衆になるのかということは二義的なものであると考えられる。

元摩気では入株と称して系譜関係がない家が新たに株の成員になり、宮衆となる権利を獲得した家があるという伝承を持つ株も存在している。さらに、竹井の中で表面化することは無かったが、第二次世界大戦後にはクジユウノトウを選出する宮衆になる権利を得ようとする株も存在していた。地域社会の中で宮衆となることは一定の威信を獲得することであると言えるが、現在の竹井では新たに宮衆の権利を獲得しようとする家は存在していない。さらに、一部ではあるが、宮衆であることが祭祀での負担につながり、その負担から逃れたいと考える人々も現れるようになった。このような事態は、従来までの閉じられた社会での威信の獲得が地域社会で生きていくうえで重要な問題であったが、多くの家が外部社会で生計を立てていくようになり、地域社会での威信の獲得が重要なものとはみなされなくなっていく結果であることを示している。

【キーワード】株、宮衆、祭祀権

はじめに

本稿はいわゆる株座的な形態を持つ祭祀組織とその構造、及び当該の祭祀組織が執行する祭儀について報告し、座的な集団の成員権を持つことが当該社会において、どのような位置づけを与えられているのかについて検討するものである。そのため、祭祀に関与できる家とできない家が自らの家をどのように位置付け、逆の立場にある家をどのように位置付けているのかをみてゆく。祭祀に関与できる家とできない家が自らの家をどのように位置付け、逆の立場にある家をどのように位置付けているのかをみてゆくことにより、現在の村落社会において、祭祀権を有することがどのような意味があるのかを考察することにする。

民俗学において宮座研究をはじめとする祭祀組織研究の多くは、日本社会の地域的特質を析出するための一つの手段であり、そのために祭祀組織の分析を通じて村落構造を明らかにしてきたといえよう。⁽¹⁾ 祭祀組織研究の中心である宮座は座を構成する家々の対内的平等性と対外的な排他性を特徴としており、その平等性が何によって担保されているのかをどのように理解するのかによって、研究者の社会理解のあり方が現れているといえる。⁽²⁾ しかし、祭祀組織の研究において祭祀権を持つ者と村落社会との関りについての検証はなされているものの、祭祀権を持たざる者に対する視点が欠如しているのではないだろうか。社会研究の一環として宮座を考えるのであれば、いわゆる株座を事例として分析を行なった場合には、祭祀から排除されている家々を捨象することに問題は無いのであろうか。

株座的形態の祭祀組織から村座的形態への移行は、当該社会のあり方と株座的な形態の祭祀との間の社会的構造のズレを修正するものであり、祭祀権を持たざる人々の存在を捨象して理解することはできない。

例えば、亀岡市旭町山階では昭和二〇年代までは氏神の例祭にはいくつが存在している伊勢講に属している家々の人だけが、一定の年齢になると宮当という一種の当屋を勤め、その後、宮衆の経験者から年長順に廻る年番神主を勤めるというものであった。そして、例祭の費用はそれだけの伊勢講から提供されていた。しかし、農地解放によって各伊勢講は所有していた講田を失い、次第に伊勢講で祭礼の費用を賄うことが困難になっていた。当時、伊勢講に属していない家の一部から、民主化という大義名分を掲げて祭祀権の開放を要求する動きがあった。その結果、祭礼の費用を村の全ての家に賦課する代わりに祭祀権を村の全戸に開放することになった。⁽³⁾ この事例は祭祀権を有する家々が加入していた複数の伊勢講の経済的な基盤が農地解放によって失われたことと、祭祀権を持たざる家々が祭祀権の開放を要求していたことにより、村座化したものである。いわば、祭祀から排除されている人々(家々)が、当該社会において祭祀権を持つことに積極的な意味を見出し、自らもその中に入ろうとする意図があれば、祭祀集団と社会との関係が密接なものとなることを示している。

それでは、いまだに株座的形態の祭祀組織を維持している社会では、何故、成員権の拡大が行なわれなかったのだろうか。さらに、祭祀権を有している側ではどのような論理によって、成員権を維持し続けているのであろうか。そして、成員権を持たざる家々は何故そのような境遇に甘んじているのであろうか。このような課題について考えてゆく必要があるのではないのだろうか。

そこで、本稿では株座的な形態の祭祀組織を有している社会の事例として南丹市園部町竹井の祭祀組織について検討する。竹井の氏神である摩気神社の例祭には竹井だけではなく近隣の仁江・船坂・半田・大西・黒田・宍人・城南町などが関与しており、比較的広い氏子域を持つ旧園部町域でも古格を誇る神社である。ただし、竹井以外の村々はお旅所で

の儀礼のみに参加するものでもあり、摩気神社以外の神社を氏神として祀っているため、本稿では竹井を中心とした事例の報告と考察を行なうものとする。⁽⁴⁾

① 丹波地域の祭祀組織

丹波地域の祭祀組織はどのような特色を有しているのだろうか。丹波における祭祀組織を研究する際に竹田聴洲の業績を無視することはできない。竹田は同族祭祀ないしは祖先崇拜と宮座との関連について詳細な事例の報告と検討を行なっている。竹田は丹波に広く分布している株の祭祀である「株講」や「先祖講」などが顕著にみられることがこの地域の特色であるとした。⁽⁵⁾さらに、宮座との関連において同姓の一族が座株を占める一族座の存在が同族祭祀の一種と捉えられること、宮座の枠組みを村落の氏神に限定しないなら同族祭祀は宮座の縮小版であると捉えることも可能であるとした。⁽⁶⁾

竹田は同族を基盤とした祭祀を中心としたものであり、同族祭祀が重層的な様態を示す村落の分析が中心となっている。中でも亀岡市馬路の同族祭祀は単なる同族結合を維持するだけのもではなく、郷土・小百姓・水呑百姓のそれぞれの階層を集める機能も有していたことを示したものであり、丹波の株と祭祀との関連を検討する上で重要な示唆を与えているといえよう。⁽⁷⁾

竹田の視点とは異なるが八木透は口丹波の祭祀組織の近世から近代にいたる変容に焦点をあて、社会的な格を株が担保しており、村落祭祀などを特定の株が占めていたが、株結合が希薄になると株を基盤とした講を結成し、講を祭祀組織形成のための基盤としたのであろうという仮説を提示した。⁽⁸⁾大野啓は口丹波における株を検討し、氏神祭祀の場で特定の株の成員が当屋となることを指摘し、株座的な祭祀組織を持つ社会の

中では株が一つの指標となることを明らかにした。⁽⁹⁾

竹田・八木・大野の三者が丹波を理解するうえでは株の存在を無視することはできないとしている。八木と大野は株が口丹波の村落祭祀の祭祀権を規定する存在であるとの見解を示している。すなわち、口丹波における株座的な祭祀組織では当屋選出の順序が年齢順であるが、家並み順であるが、家を基礎的な単位とするのではなく、株を基盤としたシステムが構築されていると考えることができる。

② 摩気神社の祭祀

ここでは、竹井の祭祀についてみてゆくことにする。まずは、本稿で取り上げる竹井の概要についてみてゆく。竹井は篠山街道沿いに広がる集落であり、南丹市園部町の西端部に位置している。東は同市園部町仁江と南西には同市園部町天引と境を接し、山を越えた西側には兵庫県篠山市と境を接している。

竹井は近世から近代の初頭にかけて、摩気・篠田・上仁江の三つの村落として独立していたが、一八七六年に三カ村が合併して竹井村となった。その後、一八八九年には周辺の村々と合併して摩気村の大字の一つとなり、一九五五年以降は園部町、二〇〇五年以降は南丹市の一大字として現在に至っている。

現在の竹井は元摩気・篠田・辻田・今井の四つの小地区に分かれている。元摩気は近世期に摩気と呼ばれた村に該当し、辻田・今井が上仁江村に、篠田が篠田村にあたる。竹井には一〇の隣組があり、そのうちわけは、元摩気は四つ、辻田は三つ、今井は二つ、篠田には一つの隣組が存在している。隣組は小地区を越えた家々で構成されることはない。人々が日常生活で顔を付き合わせ、頻繁に行き来するのは小地区の中であるという。また、同姓の家々によって構成される株と呼ばれる同族も小地

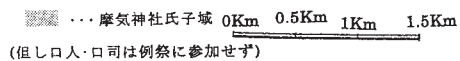


図 1 調査地周辺図 1

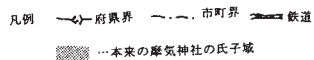


図 2 調査地周辺図 2



写真 1 鳴子で代掻きの所作を行なう宮衆

区内で完結している。そして、摩気神社の氏子総代もそれぞれの小地区から一人ずつが選出されている。摩気神社の祭礼では元摩気と他の小地区の祭祀集団とで役割が異なっている。しかし、竹井は摩気神社の宮元の集落であり、一つの集落であるという意識が強いことも事実である。

摩気神社の一年間の主な祭礼は六月に行なわれるお田植、一〇月の秋季例祭である。このうち、お田植は竹井のみで執行されるものであり、例祭は周辺の地区も参加して行なわれる。

お田植は元摩気に六人いる宮衆と呼ばれる者の代表者が中心となり竹井の氏子総代と女性によって執行されている。お田植は六月六日に摩気神社で行なわれる。お田植が始まると宮衆の代表は二〇本の粽を三方の上に載せて神前に供えてから自らは本殿の端に座る。そして、氏子総代が太鼓を叩くと音に合わせて一〇名から一五名ほどの早乙女が拝殿でお田植踊りを行なう。その後、宮衆の代表が本殿で歛に見立てた鳴子を持つて、代掻きの所作を行なう。

この所作が終わると神主が早乙女二人を招き、本殿に進んだ早乙女に供えられている粽を渡す。早乙女は本殿の階段を田に渡された粽を苗に見立てて田植の所作が行なわれる。田植の所作が終わると早乙女は拝殿に戻り、再びお田植踊りを踊る。田植の所作を行なった早乙女は、再び神主に招かれて本殿に昇り、苗に見立てた粽を取り入れて神主に手渡す。神主は手渡され

た粽を三方に載せて本殿に供えてお田植の儀礼は終了する。

例祭は一〇月一三日から一五日にかけて行なわれている。先述したように例祭は旧摩気村を中心とした村々が何らかのかたちで祭りに関与している。一三日には船坂の公民館に摩気神社の神主が招かれ、船坂の稚児の披露が行なわれる。翌一四日の午前中には摩気神社で竹井の氏子総代と区長をはじめとする役員などと近隣の大字の氏子総代が参加して祭典が開かれる。午後になると竹井の人々が摩気神社から船坂に鎮座するお旅所に向けて神輿の巡幸を行なう。なお、同日の午前中に仁江の公民館には竹井の宮衆から選ばれるクジウノトウが、神主の代理として仁江の稚児の披露の宴に招かれる。この席ではクジウノトウは稚児とともに上座に据えられ、本膳でもてなされる。そして、クジウノトウが宴席の終了を告げると、稚児・氏子総代や仁江の祭りの当番などの人々を率いて摩気神社の前まで進んだ竹井の神輿を迎えに行き、神輿を先導するかたちをとって船坂のお旅所に向かう。

また、船坂の稚児行列は仁江と船坂との境で竹井の神輿と仁江の稚児行列を迎え、行列の最後尾についてお旅所に向かう。お旅所の前に到着すると仁江の稚児行列が竹井の神輿に道を譲り、竹井の神輿、仁江・船坂の稚児行列の順にお旅所に入る。お旅所に入ると船坂と仁江の役員が新穀を詰めた小さな米俵を奉納して神輿巡幸は終了する。巡幸終了後も六人の宮衆と神主はお旅所の社務所に籠り、夜の相撲神事に備える。

一四日の深夜になると宮衆がキッタテメシと呼ばれる神饌の準備にかかり、お旅所の横に神饌棚を設け、キッタテメシなどの供物を一一組備える。そして一五日の午前二時ごろになると竹井・仁江・船坂・大西・黒田・穴人・半田・城南町の各集落の摩気神社例祭の当番となっている人々が参集する。さらに、沙汰人と十人程度の船坂の当番が櫓を持ってお旅所に参る。なお、船坂の当番はお旅所に到着すると全員がお旅所内の庁屋に入る。

汰人が参拝者に相撲神事の開始を告げる。沙汰人の神事開始の声が上ると船坂の当番の一人が土俵上に上がり、袴の腿を取り泥鰯すくいを行なう。その後、竹井の宮衆の一人が泥鰯すくいを行ない、半田の当番もこれに続く。泥鰯すくいが終わると竹井の宮衆が呼び出し役となり、最初に「半田待ち相撲、竹井出相撲」と呼び出し、それぞれの集落の代表が相撲の所作がとられる。以下、各集落の名前が次々と呼び出され、相撲の所作を行ない、最後に「船坂半相撲」と呼び出し、船坂の当番が一人で相撲をとる所作を行ない、最後には投げ飛ばされるように土俵の上で転がる。相撲が終わると練と呼ばれる芸能が行なわれ、竹井の宮衆が「これにて夜の神事を終了します」と告げると、全ての人々は自らの集落へと帰ってゆく。

午後二時半過ぎになるとお旅所でお千度・流鏑馬を行なった後に竹井の神輿が還幸する。これらの儀礼には竹井のほか仁江・船坂・宍人・大



写真2 キッタデメシを供える宮衆

一同がお旅所に到着すると大西の当番が篝火を焚く。そして、沙汰人が神主の指示を受けてお旅所に参集している人々に対して自らが持参した榊でお祓いを行ない、相撲神事が開始されることを告げる。沙汰人は再び神主の指示を受け、船坂の当番にお神酒を本殿に奉納するように告げる。その後、船坂の当番が神主と沙汰人の指図に従い、神饌を供える。神主が祝詞を奏上してから、船坂の当番が神饌を下げて全員が庁屋に戻ると、沙



写真3 相撲神事で行事役を勤める宮衆

の介添えを受けながら的にむかって三度矢を射て、流鏑馬は終了する。流鏑馬の終了後、神輿が摩気神社に向けて還幸して例祭は終了する。

③ 竹井の祭祀組織

竹井では宮衆とクジュウノトウが摩気神社の祭礼を執行するに当たって非常に重要な役割であると考えられている。宮衆はお田植には竹井を代表するものとして参加しており、例祭のお旅所の神事では神饌の準備だけではなく、泥鰯すくい・相撲・練といった芸能の仕切り役となる。また、クジュウノトウは宮衆ほど目立った役割はないが、仁江の稚児がお旅所に向かう際には神主の代役として行列に参加し、行列の出発時間を決める権限を有している¹⁰⁾。

それでは、宮衆とクジュウノトウはどのように選出されているのかに

西が参加する。仁江と船坂は流鏑馬を行なう稚児を中心とした行列を作り、仁江はクジュウノトウ、船坂は神主をともなってお旅所まで来る。お千度は仁江の当番を先頭に船坂の当番が幣束・弓・矢・的・俵などを持ち、宍人と大西の当番が鋤・鍬と馬鋤を持ち続いて牛が拝殿から庁屋の周囲を三周する。お千度が終わると幣束を神輿の前に置いた後に流鏑馬が行なわれる。仁江・船坂の稚児がそれぞれの当番

ついてみてゆく。宮衆の選出母体は元摩氣に限定されている。元摩氣には六つの株があり、それぞれの株から宮衆が一人ずつ選出されている。そして、宮衆の代表は各株の持ち回りとなっている。全ての株では宮衆の代表を勤めると次の者に交代することになっている。元摩氣の株は三軒から一〇軒で構成されており、家数が少ない株では各家の負担が重くなり、家数が最も多い株の成員は一生に一度、宮衆を勤める程度の負担しかかからないのである。

クジユウノトウは元摩氣を除いた地区から選出されている。クジユウノトウは宮衆と呼ばれる家の当主が一年交替で勤めている。宮衆は八軒の家で構成されており、クジユウノトウを八年に一度、勤めることになっている。

一般に竹井では元摩氣の宮衆でも篠田・辻田・今井の宮衆でも「良い株のもん」が勤めるものであるとか「良い家筋のもん」や「良い株のオモヤ（本家）」が勤めるものであると語られている。竹井で具体的に「良い株」や「良い家筋」とは郷士の系譜引くものないしは摩氣神社が現在の地に鎮座する際に何らかの役割を担った人々の子孫であると考えられている。元摩氣では株に属する全ての家が宮衆を勤めることになっている。篠田・辻田・今井の三つの小地区では合計一四の株が存在しているが宮衆を勤める家は八軒だけである。一つの株から宮衆を二人以上出していることはないため、特定の株の本家が宮衆の権利を有していると考えられている。現在、八軒の宮衆のうち六軒が株の本家であり、残りの二軒は本家以外の家が宮衆の権利を有している。

A株は本家ではなく、その直接分家が宮衆となっている。本家が宮衆の権利を有していないのは、昭和初期に本家が大きな借金を背負い、屋敷田畑などを売り払って借金を清算し、竹井から他所へ転出することを余儀なくされたからである。本家が竹井から転出するに当たって宮衆の権利をどの家に譲渡するかが問題になったが、学校の教員をしていた人

物に宮衆の権利を引き継いだ。当時、社会的地位が高いとされていた教師なら宮衆の権利を譲渡しても株内から反対されることもなく、他の宮衆にも迷惑をかけず、クジユウノトウを勤めても他の集落から由緒を汚すなどと言われたり、正当性を云々されたりすることはないと判断したのである。なお、第二次世界大戦後になってA株の本家は竹井に戻り、再びA株の本家として成員から認められている。しかし、他所から戻った後も近年まで竹井の宮衆の権利を本家に戻そうという動きは全くなかったという。

もう一つの事例であるG株では株の中で最も古いといわれている家が宮衆の権利を有している。これは、昭和初期に分裂以前のG株の総本家は後嗣がない状態で経済的に破綻し、第二次世界大戦中に竹井から他所に移り絶家した時に唯一の直接分家であった家に竹井の宮衆の権利が譲られた。その後、G株の成員が多くなったため、株としてはGとHの二つの株に分裂したが、この宮衆の権利を有している家ではG株とH株の二つの株の代表として宮衆の権利を持つているという意識があるという。なお現在、G株の宮衆が高齢で足の調子が悪くなったため、クジユウノトウを勤めることが困難となり、さらに家の跡継ぎが村の外で働いており、クジユウノトウの役割を果たすことができないため、株内に宮衆になる権利を譲渡したいと考えている。しかし、権利を譲り渡されたのが、G株が分裂する前だったため、H株の家にも権利を渡す可能性を残さなければならぬのではと考えており、他家に権利を譲るに譲れない状況になっているという。

篠田・辻田・今井で宮衆であることは由緒正しき郷士の嫡流の家の当主であると考えられている。そして、宮衆となる要件は郷士の嫡流の家の主であること。すなわち、宮衆は特定の家を基盤とした集団であるようにみえる。しかし、A株のように本家が没落して竹井から転出するような事態を招いた例やG株の本家のように後嗣がない状態で経済的に

破綻した上で村外にでるようなことがあったとしても、A株もG株も株内の調整によって宮衆となる権利を特定の家が保有するようになった。

もし、宮衆となる権利が由緒ある家筋の嫡流であることが絶対的な条件であれば、A株やG株のような例は起こり得ないであろう。そして、株内での権利の継承が認められたとしても、他の宮衆から権利の継承に関して容喙される可能性もあつただろう。しかし、当時の状況を知る人によると本家から分家に宮衆の権利を譲るに際して、他の宮衆の家々の介入はなかったという。さらに、G株で本家が絶家して分家に宮衆の権利が継承された事例でも家を宮衆の権利の単位とするのであれば、本家の絶家とともに宮衆の権利は消滅してしまうであろう。宮衆の権利が継承されるにしても本家の血脈が絶えることが現実になった段階で、株の成員もしくは本家の姻戚から跡継ぎを迎えることを選択したであろうが、実際には本家の後嗣を迎えることはなく分家に宮衆の権利が移つたのである。

篠田・辻田・今井では宮衆がいわゆる「良い株のオモヤ」であるという意識が強く、それは現実を反映したものであることは明らかである。しかし、A株やG株の事例をみると、本家に何らかの支障が生じた場合でも、同じ株の成員であれば宮衆の権利を継承することに問題はなかったのである。A株で本家が竹井から退転する際に宮衆の権利をどの家に継承させるかという問題は、株の問題として処理されている上に、本家が竹井に戻った際にも宮衆の権利を本家に返さなければならないという話が出なかったのである。これらのことは、元摩気だけではなく篠田・辻田・今井でも由緒正しい「良い株」に属していることが宮衆の権利を持つことの一義的な要件であり、「良い株のオモヤ」であることが、絶対的な要件ではないのである。

④ 宮衆であること

ここでは、宮衆であることが竹井でどのような意味を有しているのかについて検討する。先にみてきたように、竹井では宮衆であることが由緒正しき株の成員であり、元摩気以外の小地区では由緒正しい株の本家であると考えられている。これらのことは、宮衆であることが郷土の系譜に連なる侍筋の家であつたり、摩気神社鎮座の際に功があつた家筋のものであつたりするという自家の由緒正しさを主張する根拠になっていることを示している。さらに、昭和初年以前に生まれた人々は第二次世界大戦後から昭和三〇年代の前半までは「良い家のもんでないと村の役職にならない」と語っており、宮衆の家筋の者もしくは宮衆の家筋の株の成員でなければ、村の役職に就くことは困難であつたという。このような状況を考えると、かつては村落運営に参加できるか否かが宮衆の権利を持つ株に属しているか否かによって暗黙裡に決まっていたといえる。もともと、過去の話としても宮衆の権利の有無が村落の役員決定の際に影響を与えたと言語する人々は高齢者のみであり、現在の竹井において宮衆であることの意味を考える上では大きな意味を持たない。

現在、竹井において宮衆であることはどのような意味を持つのだろうか。元摩気のJ株のある人は「宮衆なることは名誉なことかも知れんけど、うちは株の人間が少ないから何回もやらんとあかんからかなん。I株みたいに株が大ききりゃ、一生のうち一回やりゃええんやから」と述べ、株の規模によって宮衆を勤める頻度に差があることに不公平感を抱いている。元摩気では株を単位として宮衆を勤めることは株間の負担に差が生じており、そのことを問題視している人々が少なからず存在している⁽¹⁾。なお、J株のある人物は自ら入株を勧誘するわけにはいかないが、株に属していない家から入株を打診されたら、おそらく認められるだろ

うと語っていた。入株によって株の成員を増やしたという伝承がE株にあり、元摩気では必ずしも分家によって株の成員が増えたのではなく、株に属していない家が入株することによって、成員を増やしたこともあった。そして、宮衆になる権利がない家が株に加入することによって宮衆になりうるのである。

クジユウノトウを勤める宮衆であることは、仁江で神主の代理として振舞うことから、摩気神社の氏子として非常に名譽なことであると考えられている。クジユウノトウは八年に一回勤めれば良いもので元摩気の宮衆ほどは重い負担としないと考えられている。ただ、その一方で老人の中には仁江の人々が見ている前で行列を作って歩いている最中に倒れるなどの失態を犯さないか不安に駆られている者もいる。

A株の宮衆の当主は自身が高齢のため、クジユウノトウとなり、例祭に際して仁江に向いて宴席に出席して、さらに摩気神社からお旅所までの間を歩くことができるかどうか不安を抱いており、次にクジユウノトウが廻ってくるまでに自ら身を引こうとしている。彼には他所で働いている後継ぎはいるが、宮衆の権利は、本来、本家が持つべきものであり、宮衆の権利を本家に返すことがA株の本来あるべき姿であると考えている。

G株でも宮衆の当主が世代交替を考えている。彼もクジユウノトウを勤めて仁江と竹井との間を歩くことが辛くなったため、次の世代に宮衆を譲りたいと考えている。ただ、彼の家の跡取りが竹井から他所に出て生活しており、家の世代交替をそのまま宮衆の世代交替にすることができない状況である。かつてG株とH株は一つの株であったため、新たに宮衆の権利を別の家に譲るには、G株の成員だけではなくH株の成員からも合意を得る必要があると考えている。

また、竹井では一般に株の成員が減少し、一軒だけになった場合には周囲から株として認知されない。しかし、T株は一軒のみでも株を構成

していると考えられている。そして、竹井の人々はT株が由緒ある家だから一軒になっても株と認知されるとしており、篠田・辻田・今井では宮衆であることが、株を構成する十分条件であるとされている。

それでは、本家や株の成員が宮衆となっている篠田・辻田・今井の人々は宮衆であることをどのように考えているのであろうか。A株の本家の当主は株として宮衆を出していることは、由緒ある株として当然のことであるとしている。宮衆を出す株であることは「百姓の株」と呼ばれている宮衆を出すことができない株や株を構成していない家々よりも格が高いことを暗に示しているのだとしている。また、同家が「良い株のオモヤ」でありながら、宮衆でないことについて、本来は自らの家が宮衆となるべきであるとしながらも、クジユウノトウになって神主の代理として仁江に行っても、一度、借金を背負って竹井から退転した家の者だという目で見られると、家や株の恥になると考えており、現在の宮衆の家が権利を世襲し続けるべきであると考えている。ただし、A株では現在の宮衆が権利を本家に戻したいという意向を年に一回行なわれている株講の席で示している。万が一、現在の宮衆の家でクジユウノトウを勤めることが困難になった際には、クジユウノトウを無事に勤めるため本家が宮衆になるか、他の成員に宮衆の権利を譲る橋渡しをしなくてはならないのではないかと考えているという。なお、他のA株の成員はクジユウノトウを勤めることは、自身に関係があることと考えている人はほとんどいないという。

K株の成員の一人は宮衆がクジユウノトウを勤める際には、親戚や株の成員を招いて宴席を設けることもあり、経済的な負担が大きいという印象を持っている。そして、宮衆となつて八年に一度クジユウノトウを勤めることに對して職場での理解を得ることが難しそうであるという感想を持っている。ただ、彼自身が仁江や船坂に住む人々との付き合いでは本家が宮衆であることは鼻が高いという。

先に述べたようにG株は総本家に当たる家は絶家しており、最も古い分家が宮衆となっていた。そして、昭和二九年に株の成員が多くなりすぎ、株として機能しなくなったため株を二つに分け、新たにG株とH株が成立した。宮衆が属している株が分裂したが、新たにできたH株の成員が宮衆となることはなかった。現在、H株の成員は冠婚葬祭などの株としての付き合いは、分裂した株を単位としている。しかし、G株の家がクジウノトウを勤める際には、常にH株の家が何軒か招かれている。H株の成員は自らの株を宮衆の権利を持たない「百姓の株」であると考ええることはなく、侍の末裔である「良い株」だとしている。

H株のある人物は宮衆であることについて、竹井をはじめとする摩氣神社の祭祀に参加する地域内では、家の格の高さを誇ることになる。しかし、京都などの他所に働きに出ている者にとっては、クジウノトウになれば、親戚や分家などを宴席に招かなくてはならないうえに、平日に欠勤しなくてはならないなど職場に気兼ねしなくてはならないので、負担が大きい宮衆になりたいという人はいないだろうと考えている。

以上、簡単に宮衆の家々といわゆる「良い株」の成員が宮衆をどのようなものとして考えているのかについてみてきた。いうまでもないことであるが、宮衆であることは当事者にとって、名誉なことであると意識されている。しかし、実際はそれだけで済まされるものではない。元摩気では株の規模による宮衆を勤める年数が大きく異なっていることに對して不満を持っている人がいることも事実である。そして、規模が小さい株の成員からは株に属していない家が入株を希望しないかという期待を持っているのである。また、他の人には話すことはできないとしながらも、宮衆の選出を株が基本になる方式から隣組などを基本にして選出する方式に改めるべきだと語る話者がいたことも事実である。しかし、この人物も表向きは株を基盤とすることが伝統的な祭祀を守ることであるという立場を表明しており、宮衆になることの名誉と負担の間での葛

藤があることを示している。

篠田・辻田・今井の宮衆も自身の立場を名誉あるものと認識している。特にT株の宮衆の当主は万が一、クジウノトウ選出の母体として宮衆の存在がなくなれば、自らの株は株として認知されなくなり、由緒ある郷土筋の株としての評価を失うのではないかと考えている。それゆえ、彼は宮衆であることに對して人一倍の矜持を持っている。その一方で、A株やG株の宮衆の当主のように宮衆の権利を有していることに負担を感じている人がいることも事実である。特にA株では現在の宮衆の家と本家との間で、宮衆の権利を互いに譲り合っているような事態に陥っているのである。また、宮衆の中にはクジウノトウの選出母体を宮衆からもう少し拡大してもいいのではないかと考えている人もいるが、他の宮衆の人々の前でこの考えを話したことはないという。

また、宮衆ではないものの株の本家などが宮衆である人々は、由緒ある株の成員であるという意識を有している者が多いようである。その一方で、宮衆は世襲であるという原則があるためか、自身の問題として宮衆の存在を考えることは無い様である。H株の成員の一人が「株の本家なんか宮衆をやってるんが一番ええ。郷土の株ってプライドもあるし、クジウノトウを勤めるんに面倒なことやら、いらん金を掛けたりせんでええ」と述べた内容は同様の立場にある人々の考えを端的に代弁したものであるということができるだろう。

⑤ 宮衆でないこと

ここでは、竹井において宮衆となることができない家や成員に宮衆がない株の人々は、宮衆についてどのような考えを持っているのかを検討する。先に述べたように元摩気で株に属していない家は宮衆ではない。元摩気では株に属していない三軒のうち二軒は明治時代に竹井に來住した

という伝承を持ち、一軒は第二次世界大戦前に竹井の縁者を頼って来住したという。

これらの家々では宮衆が自分たちに直接的には縁のないものであると考えている。元摩気では宮衆は古くから続くと言われる株を基本とするものであり、竹井に住んでからの歴史が他の家々に比べて浅いため、仕方がないという考えを持っている者が多い。一軒の家の当主は若い時分に、J株は成員が少ないから自家が入株を希望すれば、J株の一員になることができ、宮衆を勤めることができるのではないかと考えたことがあったという。J株の成員になれば、姓が異なっても由緒ある株の一員として竹井の中で家の評価が上ると考えていたのだという。ただし実際には、宮衆を勤めるための経済的・時間的負担が大きいと考え、J株に入株の打診をしたことはなかったのだという。

N株の成員の一人によると、宮衆であることは、摩気神社の宮元の集落である竹井に住む者の中でも選ばれた存在であり、クジウノトウとして神主の代理を勤めることは名誉であると考えている。彼自身は神社の祭礼などに熱心に参加しており、自らが宮衆ではないことを残念なことであると思ったこともあるという。また、彼は「良い株のオモヤ」が宮衆を独占していることに疑問を持っており、篠田・辻田・今井の各家に宮衆になる権利を広げるべきであると考えている。ただし、彼が竹井の中で昵懇にしている人にこの考えを話したところ、竹井は摩気神社の宮元の集落だから他の集落が株にこだわらなくなるまでは、宮衆の家を固定化している現状を変えるべきではないと説得されたため、他の人々には自らの考えを伝えていないという。なお、N株の成員のうち数人はこの人物がクジウノトウになることを望んでいることをうすうす感じており、彼を変わった人物であると評するとともに、彼が竹井の外で就業していないため、現在でも宮衆や摩気神社の祭礼に関わることに執着を持っているのではないかと考えている。N株の高齢の成員もかつては

「良い株」であることに羨ましさを感じていたが、自らがその一員の証である宮衆になることは考えられなかったという。

宮衆は「良い株のオモヤ」であることだとP株の一員は述べていた。そして、その人物は摩気神社の祭礼でクジウノトウが仁江で神主の代理となるため、仁江の体面を守るために格の高い家が出向くことが重要なので由緒ある株の本家が宮衆となっているのだらうと考えている。この人物は宮衆を母体としてクジウノトウを選出することは不平等であると考えているが、クジウノトウになると仕事を休まなくてはならない上に、株を新調したり、披露の宴席を設けたりしなくてはならないため、宮衆になる権利を得たいとは考えていないという。このように考える理由としてP株ではモリサンという祟り神の祠の祭祀を輪番で行なっているが、P株の全ての家が兼業農家となったため、自由に仕事を休めず、モリさんの祭祀も簡略化している。祟り神の祭祀も十分に行えないにも係わらず宮衆になって、さらなる負担を背負うことはできないという。ただし、第二次世界大戦後にはP株の中でも宮衆が「良い株のオモヤ」を独占している状態を改善できないかという話題がでることがあった。しかし、昭和三〇年代半ばから兼業農家が増加してくると、宮衆の権利を拡大すべきであるという話題がP株の中で出ることにはなくなっていくという。

以上、株に属していない家や宮衆の権利を持たない株の成員が宮衆をどのように考えているのかについての事例をみてきた。元摩気では株に属していない人々は摩気神社の氏子域において宮衆であることは古い家筋の株という評価を与えられるとしている。ただ、入株を行えば、宮衆になれるが、それに伴う様々な負担に耐えることができないことから宮衆になることを断念したという人物もいる。このことは、元摩気では宮衆となることの負担に耐えることができ、受け入れる側の事情さえ許せば古い家筋の株の成員になり、宮衆になることが可能だと認識されて

いることを示している。

篠田・辻田・今井でも宮衆であることが、摩気神社の氏子域で一種の威信を持つことであると考えられている。そして、宮衆であることに對する羨望の眼差しを持ちながらも、「良い株」の成員ではない事実の前に宮衆の権利を獲得しようとする行動を起こせなかったのである。現在、N株で宮衆の権利を拡大すべきであるという考えが広がりを見せていない。これは、宮衆であることが由緒正しい家であることは認めているものの、宮衆になって新たにわざわざ職場で理解を得るための労力や気兼ねをする必要はないと考えるようになってきていることが背景にあるのではなからうか。

⑥ むすびにかえて

これまで、竹井の祭祀組織の構造、祭祀組織の成員であることの意識と祭祀組織から排除されていることの意識についてみてきた。そこで、まず竹井の祭祀組織の構造について検討する。竹井の祭祀組織は元摩気を基盤とするものと篠田・辻田・今井を基盤とするものとに分かれており、それぞれの職掌だけではなく、祭祀を執行するための役の選出方法が異なっている。元摩気では各株から宮衆が選出され、一年交替で宮衆の代表となり、お田植の執行に関わったり、相撲神事を仕切ったりしている。これは、各株に宮衆の権利が等しく配分されている上に、宮衆の代表という祭祀執行の際に重責を占める役割も株間で差異が生じないシステムをとっている。そして、宮衆の役割は株が成員間で平等になるように六年交替の輪番で廻しているのである。すなわち、元摩気では祭祀権に関しては株という集団間の平等性と株内部の平等性を担保するようにしているのである。ただし、株間の平等性と株の成員間の平等性を維持することによって、祭祀権を持つ家々の間に宮衆となる頻度の差を生

じさせているのである。

篠田・辻田・今井では八軒の家が宮衆を世襲しており、宮衆が一年交替でクジユウノトウを勤め、神輿巡幸などの際に神主の代理として仁江に赴く。クジユウノトウの役割は宮衆の各家を決まった順番で巡っている。クジユウノトウの選出方法をみると、祭祀権を持つ宮衆の家を基盤とした株座的な祭祀組織であると考えることができる。しかし、この祭祀組織は家を基盤としたものであるとは言い難い。それは、宮衆の権利が株内の他家に移る可能性を有しているからである。すでにみてきたように、A株やG株では本家が退転や絶家しており、宮衆の権利がそれだけの同じ株の成員に渡っていたのである。このことは、祭祀権を有していることを象徴的に表す宮衆の地位が、個々の家ではなく、株に属していることを示しているのである。

これまでみてきたように、竹井では小地区によって祭祀組織の基盤が異なっている。両者は異なった原理によって祭祀権の有無が規定されているようにみえるが、実際は祭祀権の有無が株に規定されているという共通する原理が存在している。すなわち、株は祭祀権を共有する存在としての性格も持っているといえよう。

次に祭祀権の象徴である宮衆についてどのような意識を有しているのかについてみる。祭祀権を持つ者であろうと、持たざる者であろうと元摩気の宮衆や篠田・辻田・今井の宮衆は名誉ある地位であるという意識は共有されている。さらに、宮衆の中では郷土や摩気神社が竹井に鎮座する際に関係があったとされる伝承を持ち、宮衆であることが由緒正しい家の系譜を引いていることの証であるという意識も強い。また、摩気神社の氏子域などの近隣の集落では祭祀権を持つ家であることは郷土の家筋であるとされており、地域社会の中で一定の格式を持つ家であると認められているのである。さらに、かつては祭祀権を有する株の成員であれば、村の役職に就きやすかったと語る人もおり、宮衆であるこ

とは、摩気神社の祭礼に重要な役割を果たすだけのものではなく、優先的に村落運営に携わる権利が暗黙裡に認められていたのである。そのため、かつては株に属していない家の者や祭祀権を持たざる株の者は、祭祀権を持つことに羨望を感じていたのである。

ただし、現在では竹井で祭祀権を有する家の者が村の役職に就く際に有利に働くことはなく、祭祀権の有無に関らず時間に都合をつけることができる専門農家や自営業者が選出される傾向が強い。したがって、現在竹井において宮衆であることは摩気神社の祭礼で宮元の集落の代表として振舞うこととそれに伴う名誉、由緒が地域社会の中で認められているだけなのである。

すでにみてきたように、かつて元摩気では入株を行なって祭祀権を得た家が存在するという伝承を持つ株がある。しかし、現在の元摩気では宮衆となつて時間的・経済的な負担をしてまで地域社会内での評価を上げるべきものだと考えられていない。今井には現在でも祭祀権を持ちたいと考えている人物がいるが、この人物は周囲からは変わった人物であると評されるとともに、竹井内で営業を行なって生計を立てているため、旧来の価値観に拘泥していると判断されている。さらに、A株やG株で宮衆の権利を持つ家の家主が祭礼の際に役割を果たすことに不安を感じており、権利を株内の他家に譲ろうとしているが、積極的に宮衆になろうとする家が無く、他人事として受け止めている人が多いのが現実である。そして、G株と分裂してできたH株でも積極的に祭祀権を得ようとする動きは無い。これらのことは、現在では祭祀権を有することが羨望的になりうるものではなくなったのである。多くの人々は祭祀権を有していることに対する権威は認めているが、祭祀権に付随する負担を得てまで獲得すべき価値を見出すことができなくなっているのである。現時点において、竹井で株座的な祭祀組織が維持されている要因の一つは、宮衆であることの価値よりも宮衆であることの負担が重たいと

多くの人が考えるようになったからであろう。

それでは最後に何故、竹井において羨望的になりえた祭祀権を有することの価値が、宮衆になることの負担を下回るようになったのかについて少し検討したい。かつて、竹井やその周辺では、摩気神社の祭祀権が郷士を先祖に持つ特定の家筋や株によって占められており、祭祀権を持つことが地域社会の中で由緒ある家柄として評価されていた。しかし、仁江では相撲神事に参加する当番は特定の株に属するものが参加していたが、昭和五〇年代に隣組を基盤として選出されるようになり、必ずしも摩気神社の祭礼に参加する者全てが、竹井でいう「良い株」や「良い家筋」の者ではなくなったのである。したがって、摩気神社の祭祀権を持つことの価値が従来よりも次第に低いものと考えられるようになっていった可能性があるといえよう。

さらに、竹井では昭和三〇年代半ばまでは、専門農家は少なかったものの、多くの家が農業を中心として生計を立てており、農閑期に現金収入を得るために土方仕事や植林事業などに従事することが多かったという。しかし、昭和三〇年代半ば以降に成人した者の多くは次第に農業を主たる生業とせず、園部の町場や京都などに勤めに出るようになっていった。その結果、表1にあるように、一九六〇年から一九七〇年にかけて急激に第二種兼業農家が増加していった。このことは竹井に住み、竹井で稼ぐという従来の生活のあり方に大きな変化をもたらしたのであることは想像に難くない。当然、竹井の外で勤める人々の多くは、摩気神社の祭礼に関与することに価値を見出す社会のみで生活をするわけではなくなくなったのである。摩気神社の祭礼に宮衆やクジウノトウとして参加したとしても、それを積極的に評価しない社会で生計を立てる者が、これらの役割に積極的な価値を見出すことは非常に難しいのではなからうか。したがって、祭祀権を持つ株に属していたとしても、新たに宮衆の権利を獲得して八年に一度、摩気神社の祭礼でクジウノトウを勤め

表1 専業・兼業農家割合

年代	1960年	1970年	1975年	1980年	1985年
専業農家	3戸(3%)	6戸(6.5%)	0戸(0%)	1戸(1%)	7戸(7.7%)
第一種兼業農家	55戸(55%)	11戸(11.8%)	8戸(8.6%)	4戸(4.4%)	4戸(4.4%)
第二種兼業農家	42戸(42%)	76戸(81.7%)	85戸(91.4%)	86戸(94.5%)	80戸(87.9%)

世界農林業センサス集落カード1970年・1980年・1985年より作製

ようとする者がいない現在の状況は当然のことといえよう。祭祀権を持たざる株の成員については、今更、宮衆になる必然性がないことは言を俟たないのである。

本稿では竹井の祭祀組織に焦点をあてながら、祭祀権をもつことが当該社会においてどのような意味を持つのかについて検討してきた。竹井では祭祀権を持つことが名誉であり、祭祀権を持たざるものからは羨望の眼差しを受けるものであった。しかし、生業構造が変化していく中で、祭祀権を持つことは名誉であるには違いが、宮衆であることは摩気神社の祭祀への義務を持つことであり、負担が大きいという認識へと変化してきたのである。これらのことは、株座的な祭祀組織が維持されていることは、必ずしも祭祀権を持つ者が祭祀権を持たざる者を祭祀の場から排除しているわけではないことを示しており、場合によっては祭祀権を有している側が負担を軽減するために祭祀権を開放しようとし、祭祀権を持たざる者が負担を避けるために祭祀権の開放を望まないということが起こりうることを示している。本稿のような事例が祭祀組織研究の全てに適用することができるとは考えないが、祭祀権を有することの意味が社会の中で常に変わり続けていることは明らかになったと思う。

註

- (1) 『日本民俗大辞典』において福田アジオは宮座について「中世後期以降の惣村の成立とその伝統を明らかにする重要な材料であると同時に、日本社会の構造的特質を把握するためにも大きな手がかり」になるとしており、福田が宮座を歴史的な展開の中に位置付けようとしているといえよう。上野和男は「近江湖東における宮座の組織と儀礼」滋賀県愛知郡愛東町青山の事例」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一五）において「宮座の研究は日本社会の構造を類型的に理解しようとする研究において、特に近畿地方の村落社会を分析するにあたってきわめて重要な意義を持つ社会組織である」としており、日本の地域性、特に近畿地方の社会を把握するための事象として宮座を捉えている。
- (2) 岸田史生は「座をめぐる民俗社会―村落類型論から見た近畿地方の村落―」（『近畿民俗』一四二、一四三）において、近江の宮座を中心的な事例としている。福田アジオと上野和男を比較して以下のように視点の差異を明らかにしている。福田は伝統的祭祀組織としての宮座に、直接個人を組織化する地域社会の運営方法を見出したとして近畿地方の村落は村中心の社会であると捉えているのに対して、上野が宮座における年齢階梯の概念を家族的地位に従属するものであると捉え、近畿地方の村落を鈴木栄太郎のいう「家族本位制」であると位置付けているとしている。
- (3) 大野啓「同族集団の構造と社会的機能―口丹波の株を事例に―」（『日本民俗学』二二二）
- (4) 本稿のデータは一九九九年四月から二〇〇一年一月にかけて行なった調査で収集したものである。したがって、本稿の中で「現在」という言葉は二〇〇一年一月現在を指している。なお、「生活領域と地域・京都府船井郡菟野町竹井民俗調査報告」（『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』）において民俗誌的な報告を行なっている。
- (5) 竹田聰洲「村落同族祭祀の研究」吉川弘文館、八―一〇頁
- (6) 前掲註五、二―一二頁
- (7) 前掲註五、一九九頁―三五七頁
- (8) 八木透「一九九九年「丹波の村落と神社祭祀」（『鷹陵史学』二五）
- (9) 前掲註三
- (10) 一四日の神輿巡幸を前にして仁江で行なわれる宴の席で酒好きのクジュウノトウがなかなか宴を切り上げて、稚児行列を竹井に向けて出発することができず、竹井の神輿を摩気神社前で待たせることがあったということが語られる。このような話は竹井でも仁江でも聞くことができたが、竹井でも神輿を待たせるような失態があったのはあくまでもクジュウノトウの責任であり、仁江には責任はない。

というものであった。また、仁江でもクジュウノトウに対して行列を出発の時間が近づいていることを度々告げたが、宴を強制的に切り上げることができずに困惑したことがあったという。この話が実際にあったものであるかは判然としないが、このような語りがあること自体が、仁江におけるクジュウノトウの権威の高さと権限の強さを示しているのではなからうか。

(11) 筆者が二〇〇〇年に行なった摩気神社例祭の夜の相撲神事の間に六人の元摩気の宮衆に聞き取りを行なったところ、四人までが株を基盤として宮衆を選出することに不公平感を抱いていた。ただし彼らは株を基本とした宮衆の選出を変更すべきではないと語っていたことも付け加えておく。

主要参考文献

- 上野 和男 一九八七年「近江湖東における宮座の組織と儀礼―滋賀県愛知郡愛東町青山の事例―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二五)
- 一九九二年「荒蒔の神社祭祀と社会構造―宮座・家族・村落組織を中心として―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』四三)
- 大野 啓 二〇〇〇年「同族集団の構造と社会的機能―口丹波の株を事例に―」(『日本民俗学』一二)
- 二〇〇二年「生活領域と地域―京都府船井郡菟部町竹井民俗調査報告―」(『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』)
- 岸田 史生 一九九五年「座をめぐる民俗社会―村落類型論から見た近畿地方の村落―」(『近畿民俗』四二、四三)
- 竹田 聴洲 一九七七年「村落同族祭祀の研究」吉川弘文館
- 福田アジオ 一九九〇年「可能性としてのムラ社会」青弓社
- 二〇〇〇年「宮座」(『日本民俗大辞典』下)吉川弘文館
- 二〇〇二年「近世村落と現代社会」吉川弘文館
- 松本 通晴 一九九〇年『農村変動の研究』ミネルヴァ書房
- 八木 透 一九九九年「丹波の村落と神社祭祀」(『鷹陵史学』二五)
- (佛敎大学非常勤講師、国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- (二〇〇九年〇月二日受付、二〇一〇年五月二五日審査終了)

***Kabu-za* Being Maintained : Over the Position of *Miyashu* in Takei, Sonobe-cho, Nantan City**

OONO Hajime

This article studies the structure of the organization for religious services in *Takei*, Sonobe-cho, Nantan City, which exists in *Kuchitanba* with a form of so-called *kabu-za*, and discusses why the organization for religious services with a form of *kabu-za* has been maintained until today.

In *Takei*, there is a role called *kujunoto* selected from a family called *miyashu*, and a role called *miyashu* selected from all *kabu*, which exist in a small district called *motomake*. The houses that can assume these roles have a reputation from people not only in *Takei* but also in neighboring villages for their venerable lineage. *Miyashu* to select *kujunoto* is supposed to be assumed by a head house of a specific *kabu*, and *miyashu* must be from a family of venerable lineage. However, there are some cases where *miyashu* moved from *Takei* due to economic circumstances, and other members of the same *kabu* succeeded the right of *miyashu*. Based on such fact, the right of *miyashu* in *motomake* and the other are given to a particular *kabu*, and it does not matter which house becomes *miyashu*.

In *motomake*, there is also *kabu* with a legend of *irekabu*, which means that a house from outside becomes a new member of *kabu* and obtains the right to become *miyashu*. Furthermore, it did not come to the surface in *Takei*, but after World War II, some *kabu* attempted to obtain the right to become *miyashu* to select *kujunoto*. Becoming *miyashu* in a local community is to gain certain prestige, but there is currently no house attempting to obtain the right of *miyashu* in *Takei*. On the contrary, some people want to escape from the burden of being *miyashu*, which is heavy in festivals. Such situation is a result of changes in society. In the past, gaining prestige in a closed society was important in the local community. However, many families live outside society today, and gaining prestige in the local community is not regarded to be important.

key words: *kabu*, *miyashu*, right for religious services